萩市の病院は設備が不十分だったので、大きな病院のある山口市まで行き、結局出産するまで四ヶ月半の入院となった。すばらしいサービスのある快適な入院生活だったが、八ヶ月過ぎる頃からさすがにつらくなり、点滴も受けねばならなかった。点滴を付けたまま萩の病院から山口の病院まで救急車で運ばれた。八ヶ月過ぎる頃からさすがにつらくなり、点滴がさらに1つ増えた。

二〇〇五年の二月一日、無事に双子の女児サラちゃんと男児輝（ひかる）君が生まれた。多少の早産でそれぞれ二キロほどの未熟児だったので、保育器で人工呼吸器を付けねばならなかった。純子さんは、ほっと一息だったが、新米お父さんは、ハラハラだった。

看護師さんからは「あなたの細い身体で四キロの子どもを背負っていたのは奇跡に近い。胎盤もしっかりしている」と言われた。けれども、純子さんには、〈神さまのなされたこと〉と分かっていた。

希望していた妊娠中の受洗はかなわなかったけれど、出産後のイースターに受洗し、その一ヶ月後にご主人もイエス様を受け入れ、純子さんのあとを追うように洗礼を受けた。「雄々しくあれ、強くあれ」というみことばに背中を押されて。

「純子がクリスチャンなのに、なぜ僕はクリスチャンじゃないの？」という自問するようなことばに、揺れているご主人の心を感じた純子さんは、あえて信仰へのプレッシャーをかけることはせずに見守った。洗礼は、だれに期待されていたわけでもなく、だれから促されたわけでもなく、基広さんが自らが下した決断だった。

純子さん自身、妊娠も信仰を持つのも初めてで、分からないことばかりだったが、何よりベスとホーリー（ベスのお姉さん）、二人の婦人宣教師がずっと寄り添い続けてくれたことが大きい。一人だけだったら、医師の言うことに流されていただろうと、自分を振り返る。

以前、流産で悲しんでいた時、しつこいくらいに訪問してくれたクリスチャンの人たちを〈なんて、おせっかいでうるさい人たちなんだろう！〉と当初は思っていたのだが、今では「本当にありがたかった。逆に考えれば、来るほうも勇気がいったはずだ。もし、自分みたいな人がほかにいれば、自信を持ってどんどん出かけて行こう。あとになって必ず感謝されるから」と感じるように変えられた。

中絶を勧めるお医者さんのことばに、一時は心が揺れた純子さんだが、サラちゃん輝くんを生んだことに後悔はまったくない。どこへ行っても「よく生めましたね！」と感心される。

「人にはできないことが、神にはできるのです」（ルカの福音書18章27節）。

もうひとカップルは、長野県軽井沢町に住む長嶺聡（さとし）栄子夫妻である。10万分の一の確率とも言われる結合双胎（別名シャム双生児）の子を妊娠し、医師から中絶を勧められたが、神を恐れるゆえにあえてそれを断り、無事に出産に至り、健常児と変わらない元気な子どもたちを育てている。

結合双胎児を与えられて

聡さん（35、結婚7年目）栄子さん（37）は、二〇〇〇年三月に聡さんの故郷沖縄で結婚した。その年九月には妊娠が分かった。四ヶ月目に入っていた。

医師からは初め、「二人の胎児が見えるけれども、心音は一つしか聞こえません」と言われた。胎児二人の身体がつながっている結合双胎（けつごうそうたい）という診断だった。「ベトちゃんドクちゃんと同じです」とも言われた。

しかし、長嶺さん夫妻には、枯れ葉剤など関係がない。こうなった原因ははっきりしない。一説には、一卵性双子が分裂する時に早かったり遅かったりして、分かれきらない部分が出てくるのだと言う。

医師には、「結合双胎で無事に生まれてくる確率はほとんどなく、流産が八十数パーセント、死産が十数パーセント、生きて生まれてきても、出産後に死に至る確率が数パーセントで、ほとんど見込みがないのと、日本では奇形が見つかったら中絶するのがほとんどなので、中絶した方がいい」と言われた。

栄子さんは聴覚障害者の牧師家庭で育ち、中絶は神様が悲しむことで、あり得ない選択だったから、医者から何をいわれても「産みます」と即答した。聡さんは、妻の意向を尊重することにした。栄子さんは准看護師の資格があり、患者が病院側の言うことを鵜呑みにする必要のないことも承知していた。担当の若い女医さんも、威圧的な雰囲気はなく、対話をすることができた。

医師の言うことだけを聞いていると、どうしても不安になる。しかし聖書にはこうある。

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。—主の御告げ—それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ」（エレミヤ書29章11節）